

学びの風便り

リーディングスクール通信50 R7.9.24

発行：松本市教育委員会 教育研修センター



学びの改革のあゆみ 清水中学校・旭町中学校



＊ 自律を育む学校 ～対話や協働をととした自律～ ＊

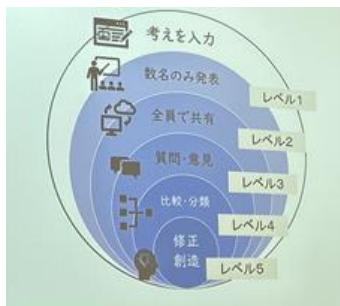


清水中学校では、「自律を育む学校」の具現に向けて、授業改善・充実に取り組んでいます。この取り組みの中で先生方が大切にしていることの一つは、他者との対話や協働をととして自己決定したり、最適解を見出したりしていくことです。

今回は、他者との対話や協働をととした自律を育む取り組みについてお伝えします。

「対話のレベル」を視点とした授業改善・充実

清水中学校のよさとして、生徒に表現力が育まれていることや、授業で同時共同編集機能を活用してリアルタイムに意見を共有することが日常化してきていることなどが挙げられます。これらを土台として、さらに自律した探究者として最適な自己決定をしていくには、他者との対話や協働の質的向上を図っていききたいと先生方は考えました。そこで、今年度は授業改善・充実の視点として、5月の職員研修で東原義訓先生（信州大学名誉教授）に教えていただいた「対話のレベル」を意識するようにしています。互いの意見を単に全体で共有するという（レベル2）に限らず、教師の意図ある支援によって、意見を比較・分類（レベル4）したり、あらたな価値を創造（レベル5）したりすることができるように、取り組みを始めた5月でした。



「自律」の意味を問い直す 岩川先生による訪問型研修

さらに7月、「自律を育む学校」について、立ち止まって問い直す研修の場を設けました。リーディングスクール Matsumoto サポート事業のアドバイザーである岩川直樹先生（埼玉大学教授、信濃教育会教育研究所長）をお招きし、全校研究授業を実施しました。生徒と生徒、教師と生徒のあたたかな応答関係が見られた川上先生の理科授業について、岩川先生は、「自律は、個人の力量形成という狭義ではなく、相互支援や対話関係という広義で考えたい。支え・支えられる応答の連鎖があってこそ、いつ支え・いつ支えてもらうかの判断となる。そして、その判断を相互に尊重するあたたかな関係性の中で、一人ひとりが成長していく。今日の授業はそういう授業で、理科の実験を見て、涙が出たのは初めてだ。」と意味づけていただきました。

自分一人の力で何かをできる姿も時には大切かもしれないが、人は一人では生きてはいけない。あたたかな集団のなかで自ら頼りにいくことも含めて自律と言えるのではないかと、問い直す機会となりました。



今後に向けて

他者との対話や協働を重ねながら探究的に学んできた成果発表の場として、11月には総合的な学習の時間の発表会が予定されています。また、教師自身も探究的な学びに取り組んでおり、10月には職員研修として「大人探究発表会」を行います。子ども達の成長のために、教師自身も成長し続ける清水中学校です。

旭町中学校：「生徒が創る学校」の実現へ～小中連携と探究的な学びのシンカ～

旭町中学校では、「生徒が創る学校」というビジョンが見える形で動き出しました。リーディングスクール1年目は、教師が生徒の「やりたい」という気持ちをどう引き出し、どう支えていけばよいかを手探りで進めていました。リーディングスクール2年目を迎えて、今では「創る・創れる」というわかりやすいキーワードを軸に、生徒たちが自ら学びを創り出す探究的な学習が行われています。

9年間を見通した小中連携のシンカ



旭町中学校には、開智小学校で探究的な学びをしてきた生徒や、旭町小学校で行事の企画から実行まで自分たちの手で進めてきた生徒が数多く入学してくるため、小学校から中学校への9年間の学びが途切れないうように考えています。今年度行った小中合同のワークショップで生まれた「気兼ねなく話せる関係性」は、先生方が日常的にお互いの授業を見学し合ったり、一緒に研修を行ったりする文化として育ってきています。こうした取り組みを通じて、小中の先生方が同じ方向を向いて子どもたちを支えられるようになり、生徒たちも安心して探究活動に向き合えるようになりました。

探究的な学びで生まれる「私の学びを創る」

「生徒が創れる」を大切にしたいという思いは、1年生の総合的な学習の時間で見られました。これまで旭町中学校の先生方が丁寧に設計してきた平和学習と並行して、生徒自身が「何を調べたいか」「なぜそれが気になるのか」を考えるとところから始まる探究的な学びにもチャレンジしています。

例えば、Tさんの「井戸」をテーマにした探究があります。Tさんは普段のランニングで松本市内の井戸をよく目にしていて、「なぜ松本の井戸には外国人観光客がたくさん来るんだろう？」という素朴な疑問から探究を始めました。調べていくうちに、Tさんは井戸の魅力を3つの角度から捉えるようになりました。まず「味の違い」では、松本の井戸水が山々に囲まれた環境で長い年月をかけてろ過された湧き水であることを知り、硬度の違いや日本の軟水の特徴について調べました。「井戸の形の違い」では、手押しポンプ式の「蔵の井戸」や六角形の「源智の井戸」など、それぞれ異なる仕組みや歴史があることを発見しました。そして「井戸から見える風景の違い」では、松本の豊かな自然や松本城などの歴史的建造物が、井戸を訪れる人々にとって特別な体験を生み出していることに気づきました。



Tさんの探究は、単なる調べ学習を超えて、「なぜ人々は井戸に魅力を感じるのか」という本質的な問いへと深まっています。そして、この美しい水が松本市の整備・管理と地域の人々の協力によって守られていることも知り、「地域とのつながり」へと広がってきています。

旭町中学校が目指している取り組みは、単に新しい教育方法を試すことではありません。生徒たちが大人になってからも、自分で問いを見つけ、調べ、考え、行動できる力を育てることです。Tさんのような探究を通じて、生徒たちは知識を得るだけでなく、学ぶことの楽しさや、自分で何かを創り出す喜びを感じています。

こうした学びの土台は、児童生徒の学びの連続性を大切に、旭町小中学校の先生方がつながり、顔を合わせ対話し、生徒の主体的な学びを支える職員集団があるからです。「生徒が創れる」を実感できる学校創りが進んでいきます。